

## 『正法眼藏随聞記』の性格について(中)

佐藤悦成

### 一

『正法眼藏随聞記』(以下『随聞記』と略称する)の仏教書としての性格を、(上)においては、過去の代表的な論考を四説挙げ、各説について検討を試みた。そこにおける位置づけとして、『随聞記』には「入門書」という性格を与えることが適當ではないかと考察した。その理由としては、記される内容の全てが、学道の用心としての坐禅功夫(只管打坐)・参師聞法に関してなされた垂示といっても過言ではないからである。それは、仏法の知的理解を戒め、正師に参じてその指導の元に坐禅を行じ、仏法体達の大事を了ぜよと、道元禅師自らの過去の体験を踏まえて学人に示しているからである。禅師が仏法体達の第一義の立場から学人に垂示しているのではないことは、『随聞記』の中に天童山における如浄下での修行時代を回顧し、在宋中に見聞した事柄を関連させ、また、禅師入宋前の栄西、明全に関する垂示が屢々見られることか

ら知ることが出来る。<sup>(3)</sup>

禅師は学人に教示するに当って、仏法未体達の学人の立場に降りて指導しているといえる。いうなれば、懐奘等が禅師を視るのと同視点で禅師は如浄、栄西、明全を視て垂示しているのである。その為に、過去の祖師方が自らの得た仏法を文字に著わした語録等を学ぶことよりも、行としての坐禅を強調しているのである。それは語録等の否定ではなく、学人の初期段階における修行の在り方を、禅師自らの体験を通して、坐禅こそ成すべき行であるとした比較の問題で語られるのである。この点については前出の拙論に述べた。

そこで、先に「坐禅功夫」により行の面から『随聞記』の性格について考察を加えたので、次に「参師聞法」により信の面から論を進める。

### 二

仏法における信については、『華嚴經』・『俱舍論』等にお

いて、煩惱に染汚された我々の心を、本来の清浄な心（仏心・仏性）に戻す働きを持つ作用とされ、常に仏法に入るための不可欠な要素とされてきた。それは次の『大智度論』からの引用によっても理解出来よう。

仏法大海信為<sub>レ</sub>能入<sub>一</sub>。知為<sub>レ</sub>能度<sub>一</sub>。如是義者即是信。若人心中有<sub>レ</sub>信清淨。是人能入<sub>レ</sub>仏法。若無<sub>レ</sub>信是人不能<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>仏法。（大正藏二五、六二一、a）

この引用から、基本的に信とは、仏法に入るための第一歩であるといえるから、その点をもって『随聞記』を繙けば、そこには学人から正師（善知識）への信が具体的な在り方として示されている。次に本文より若干の例を挙げる。

一、善知識ニ随テ衆ト共ニ行テ私ナケレバ、自然ニ道人也。（卷一）

一、然トモ皆改タメテ知識ニ従ガヒ、教行ニ依シカバ、皆仏祖ト成リシ也。（卷一）

一、我執ヲ捨テ、知識ノ教ニ随フ也。……只我執ヲ次第二捨テ、知識ノ言随イユケバ、昇進スル也。（卷二）

一、知識若仏ト云ハ、蝦蟇蚯蚓ゾト云ハバ、蝦蟇蚯蚓ヲ是ヲ仏ト信ジテ、日比ノ知恵ヲ捨也。（卷二）

一、学道ノ用心ト云ハ、我心ニタガヘトモ、師ノ言バ聖教ノコトバナラバ、暫ク其ニ随テ本ノ我見ヲステテ改メユク。（卷六）

一、何ニ本トヨリアシキ心ナリトモ、善知識ニシタカヒ、良人久

『正法眼藏随聞記』の性格について（中）（佐藤）

語ヲ聞バ、自然ニ心モヨクナル也。（卷六）

以上に挙げた如く、善知識を具体的対象として常に随順すべしとする垂示のみならず、仏祖の行履を語り、日常の所作について教示する場合にも、常に信がその根底に示されているといつてよい。仏祖正伝の仏法を自己の生令活動に具体化している善知識にこそ、全てを無条件に任せきらねばならぬと説くのである。信を機縁として染汚の自己から本来の自己へと覚めさせる最初の勝縁は、善知識に随順する信にこそ存在するのである。

禅師の著述中、『随聞記』と同様な正師の必須性は『学道用心集』五に「参禅学道可<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>正師<sub>一</sub>事」と題して記されている。

### 三

禅師の仏法を学ばんとする参学の人にとって、正師は必要不可欠であり、禅師が自らの仏法をして「単伝の仏法」と称し、師資相承、面授を重んじているのは、そこにこそ仏法の現成を認めるからである。それ故『随聞記』においては、正師に目見え、師と認得し、自己の全生命を任せきる所にこそ学仏道の第一歩があるとするのである。

この行・信の書ともいい得る『随聞記』は、その性格づけを為すならば「入門書」という言葉が適当であろう。初歩の

信は、自己を正師に任せきるといふ遮情の方向を常に説き、その結果として正法が種子として学人に薫習し、機の熟するにより現行し、学人は佛法を了解するのである。正師を介在者として、現象としての身相に依るのではなく、身相から行為として現行している法に依るが故に、信の具体的対象を正師としているのである。ここから『隨聞記』に説かれる信は、絶対の信、証と同一の信といった意味は少なく、ごく初期段階の仏道未体達の学人における信といひ得るのである。それに対する、先に挙げた如き絶対の信などは『正法眼藏』において語られる存在である。

道元禪師は、自らの正伝の佛法へ導かんがために、実践の面とともに、行を指導する師への信も入念に学人に説いた。これ等の点こそが、とりもなおさず禪師の佛法への入門書としての性格を明らかにしているのである。

坐禅功夫の面からも、参師聞法の面からも、『隨聞記』の性格は入門書としての位置づけが適当と考えるものである。

- 1 拙論『正法眼藏隨聞記』の性格について(『東海仏教』第二十六号 昭和五十六年)。

- 2 その例を挙げれば、次の如くである。

予在宋ノ時天童浄和尚、侍者ニ請ズルニ云ク、……(卷一)

先師天童浄和尚住持ノ時、僧堂ニテ衆僧坐禅ノ時、……(卷二)

建仁寺ノ僧正存生ノ時ハ、……(卷二)

- 3 先師全和尚入宋セントセシ時、……(卷六)

この初歩的な内容のみで信の意味を理解したのでは、道元禪師の佛法を全て把握できないことは勿論であるが、ここでは『隨聞記』に範囲を限定するため、深く立ち入ることはしない。

道元禪における信についての考究は次書に詳しい。  
樽林皓堂著『道元禪の研究』(中山書房 昭和四一年) 一七二〜一七八頁。

更に、信の思想的展開は『大乘起信論』の考究により明らかにされる。

- 4 修行<sup>スル</sup>仏道<sup>者</sup>、先須<sup>レ</sup>信<sup>ニ</sup>仏道<sup>ニ</sup>。

『学道用心集』九(『道元禪師全集』下巻 筑摩書房 昭和四十五年 二六〇頁)

また、『隨聞記』にも次の如くある。

一切ノ事、イズレカ大切ナルト云ニ、仏祖ノ行履ノ外ハ、皆無用也ト可<sup>レ</sup>知。(卷三)

- 5 『道元禪師全集』下巻(筑摩書房 昭和四五年) 二五五〜二五六頁。

また『正法眼藏』にも正師に関する記述は見られるが、拙論では基本的に道元禪師の著作を遮情方向を記す著作と、表得方向を記す著作とが存在すると考えており、両者を文字上の類似から混合して思想的結論を見出すのを可としないため、『眼藏』より例を挙げることはしない。

※ 拙論中の引用文及び巻数は全て、東隆真編著『五写本影印正法眼藏隨聞記』長円寺本(圭文社 昭和四四年)によった。

(愛知学院大学禅研究所研究員)